この一年

松岡建造

南海地震茫々として七十年　竜馬の銅像にわが帰りきぬ

放射性セシウム汚染は心臓の鼓動を　ふひに狂はせるらし

黒鮪の切り落としはや売り切れか棚をちらりと見返りてゆく

春一番吹かずじまひの彼岸にて甲子園球場に霰たばしる

クレーンは庭に植木を降ろしをり二月の昼の光の中に

宇宙なほ膨らむらむを人の世は握り鮨までか細くなりぬ

迎撃用ミサイル都内に配備さる米より買へるそは宝物

看護師に医局が贈る腹帯(はらおび)ぞ五ヶ月先は安産にあれ

夢に来て我が診てをる朝方の男は面(つら)を結ばざりけり

たまさかにわが老い影が老を越す声をかけたき心残して

整理へと朝動けばむっくりと手を広げ立つ物欲の念

地下階の漬け物売り場に廻りきぬ伊勢沢庵が妻の好物

体ごと我にキスする愛犬の尾は手にふれて固くありけり

広島の市電通りに幾山の死者積まれたる火葬はありき

女子バレー集合写真の前列のまばゆき脚(あし)よ　銅メダル取る

迂回して閻魔大王にぬかづかむスピード時代の落伍者われは

坪庭に聞きしが玉音でありにけり六十七年目の空耳の「朕」

テレビよりパンダの産声流れたり響きするどき獣(けだもの)の声

つるべさん民族衣装にブータンをぶらりと行きて「家族に乾杯」

冷やしたる素麺の糸しらしらと落ちゆく時に食道は滝

秋の蚊は忍者のごとし鳴き寄るを扇にて打てば

その手を刹すも

赤チョッキに桜もみちを渡りゆく老いたる目には

深紅ゆかしく

旧タウンの改造成れる中央に介護施設がでんと建ちたり

砂糖へと戦後並びし列ありき　デパートのケーキに当世の列

敗軍の将に凍むらむ霙の日泥鰌は穴にふかく籠もらむ

表土こそ田地の命　その田井の表が除染に剥がされてゆく

尖閣に心ゆらげば黄砂さへ何か不気味に染まりて見ゆる

団十郎・大鵬が後先逝ける春、我は誤嚥をけさも無事越す

肉も腱も骨化してゆく青年が山中教授と世に出会ひたり

飛魚の肢体思はせ沙羅嬢はスキージャンプをぐんぐん飛べる

戯れに店のダンベル挙げむとし腰は悲鳴すただの五キロに

西安のかの日の黄砂思はれて六甲霞みのみそらを仰ぐ

売り場にてわが家の冷蔵庫を思ひ妻を思ひて買ひ物をする

老いの背の痒き一点闇空にちかりと灯る星の如しも

午後四時の日は電気屋の屋根に敷く太陽電池をたっぷり照らす

楠の花香りを降らす下陰にわれはすがすが肺腑を開く

リクライニングベットを倒しゆく我に仰臥着地の快楽が有り

アベノミクスに先ず忘へたる改築の槌音通る街の明るさ

超高層ビル中程に大ホール　支への柱一本見えず

戸の口のアジサイ咲きて六月のわが家の唯一青き花群